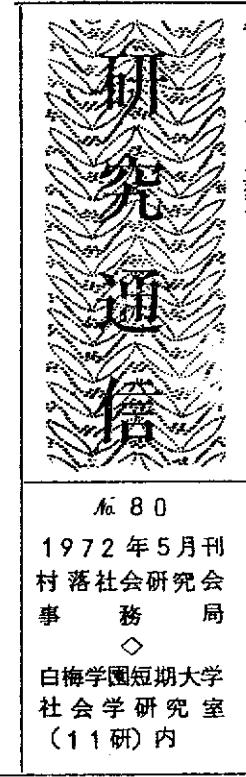


村落研究の国際交流の動き

蓮見音彦

二年間にわたる村研での方法論の討議も一応ビリオドという形になりましたが、日本の村落の解明のためにも国際的な比較といったことが大切な感じがします。昨秋の大会の懇親会の席で、イタリアから帰られた島崎氏が「イタリアの農村には村がなかった」という印象を語られましたが、村のない農村といふものが、具体的にはどうしたことなのか私は未だはっきりしない感じで、それがわかると逆に村とは何なのかといふことがもっとはっきりつかめてくるのではないかといった感じがしています。そういう意味ではヨーロッパなどでの農村研究との交流といふことは、やり方によってはみのりのあるものになるのではないかと思えるわけですが、急けものの私には、ヨーロッパで最近かなりの量の農村研究が出てきていることは知りながらも、それに十分に対応しようといふことができない



であります。どこかでそれらの仕事を概観してくれないかと思つてゐるのですが、最近このような国際交流をめざしたところみがいくつかみられますので、一、二御紹介しておきます。

その一つは、村研通信の国際版とでもいふのでしょうか、「農村研究通信」(Peasant Studies Newsletter)とさうバンフレットが、ピラツバーグ大学の歴史学研究室の D. Sabeen を編集責任者にして、発行されはじめたことです。この編集スタッフは、同大学の歴史学・経済学・社会学・政治学・人類学などの人たちで、今年一月に創刊号が出され、季刊の予定です。資金的な点はどうなつていてるのだろうと貧乏症の私どもは気になるのですが、希望の方には少くとも一年間無料で送ってくれるということで、今ところ有料になつた段階でお値段がいくらになるのかはわかりません。創刊の辞では、農村社会が激しく変動してゐる今日、国際交流が必要なことが強調されています。歴史学の研究室と国際研究センターとがこの通信を発行したわけですが、多くの学問の交流も粗つてゐるわけで、特に長期間の社会変動の過程について、歴史的にアプローチする方法を発展させることを狙つてゐるようです。この号には、ルーマニアの農村研究の動向紹介、東トルコの親族組織についての論文のほか、書評やヨーロッパ・アメリカでの最近の研究や学会の模様などが紹介されています。

日本の研究の紹介などもとめられており、どなたか論文を寄稿されるとよいと思うのですが……。どこからかの紹介やこの Sabeen 氏から私に、購読希望者の紹介と、執筆者の紹介を依頼してきていま

ます。村研でこうした仕事をしていただけたよいと思いますが、村研でそういうことをきめていただけるまでとりあえず購読御希望の方は仲介しますので私に御一報下さい。日本の研究を紹介して下さる方はおいででないでしょうか。この方も仲介いたします。

二番目に、今夏アメリカで開催される第三回世界農村社会学会議についてですが、この会議には過日の村研運営委員会で、私に出席するよう御指名をいただき、四苦八苦しているところです。もつとも未だどうなるかはっきりしないわけですが。プログラムを送ってもらいましたが、会期は八月二十二日から二十七日まで、ルイジアナ州立大学で開かれます。今回のテーマは、「開発政策と農村生活——その可能性と問題点、対照的な点と共通する点」ということで、いうまでもなく国際的な比較検討をこころみようというわけです。この頃アメリカにおられる方があれば出席されはいかがでしょうか。五月の終りまで参加の申込を受付けているということです。前回は喜多野先生や住谷先生などが出席されたとのことですが、今回はどうでしょうか。

国際的な交流といつても、それぞれに関心がちがいますから、ただ集まつただけでは大したことにはならないでしょうし、水まじになってしまふ危険があるわけですが、われわれの研究関心でヨーロッパやアジアの農村をとらえたとき、どのような把握ができるのか、そういう形での交流がなされる方向にもつてゆけるとよいと思うのですが、それが可能になるには、やはり素朴な交流をもっと拡大することは、たしかに必要だろうと思つてゐる次第です。もつとも、

これから昨年の大会報告をもとにした年報の原稿をしあげねばならず、夏の国際会議に出るにはそれなりの準備もせねばならず、気ばかりあせつてゐるこのごろです。